

## 英国レスター市における移民問題および移民への英語教育

富 田 裕 子

### はじめに

現在英国で一番ホットな話題と言えは移民問題である。なかでも英国のテレビ、ラジオ、新聞が2013年の1月から12月まで連日のように報道してきたニュースは、ルーマニアとブルガリアから仕事を求めて英国に入学すると推定される移民数だった。両国は2007年にEUに加入したが、2013年12月までは、ルーマニア、ブルガリア国籍の者が英国で就労するには労働許可証が必要であった。しかしEU加入後7年が経過した2014年1月からは、許可証なしで働けることが2007年の時点で決定していた。2013年に入ってその推定移民数があまりに莫大であったため、英国内でパニックが起きたのだ。英国は、長期に亘って高い失業率に加え、リーマンショック以降経済状況が悪化し、政府は大幅な財政赤字に苦しんでいる。

今回のルーマニアとブルガリアからの移民問題以前にも、英国は様々な移民問題に直面してきた。しかしながらヨーロッパ諸国の中でも経済的にみて明らかに後進国であるルーマニアとブルガリアから多数の移民を受け入れるということは、政府の赤字財政を更に悪化させるのではないかという強い懸念の声が上がった。EUからの移民を英国は拒絶できない。しかし短期間の大量移民は、過去にも英国社会並びに国民に大きな困難をもたらした。たとえば住宅や学校が不足し、国民健康サービス（National

Health Service、略して NHS) の病院では患者が専門医による受診を何年も待たなければならないという事態も起きた。低賃金でも働かざるを得ない移民に仕事を奪われ、失業する英国国民の数も増えた。ルーマニア、ブルガリアからの切実な移民問題にどう対処すべきかについて白熱した討論が、政治家だけでなく一般国民の間でも展開され、移民法の改正など移民数を最小限に抑える緊急策も提案された。また一方で有色人種の移民から雇用の機会均等と職場での人種差別撤廃を求める声上がり、2011 年夏にロンドンで始まった暴動が地方都市へ拡大した。その結果キャメロン首相は、「英国は多文化社会として機能することに失敗した」と言う声明を発表するに至った<sup>1</sup>。

2014 年になり 8 か月を過ぎた現段階で、ルーマニアとブルガリアからの移民数は、予想数を遥かに下回っていたため、英国政府は胸を撫で下ろしているが、今後も英連邦や EU 諸国出身の移民が多数英国に入国することを拒絶できず、絶えず移民問題に悩まされることになるう。

しかしながら英国は過去 200 年以上に亘り、西インド諸島、ヨーロッパ、アフリカ、インド亜大陸などから莫大な数の移民を受け入れてきて、概して移民に対して寛容な姿勢を取ってきた<sup>2</sup>。その結果ロンドン、ノッティンガム、バーミンガム、ブラッドフォード、マンチェスター、レスターなどは、多民族都市、多文化都市として知られようになった。なかでもロンドンには現在 300 以上の異なった言語を母語とする 60 カ国以上の国々からの移民が生活している。本稿で取り上げるレスターは、近年「民族、宗教間の関係が比較的調和した多民族都市」として国内外の注目を集めるようになった。また 2011 年の国勢調査では、少数民族の人口がレスターの全人口の 50% を超え、英国内で一番多くの少数民族が住む都市としても知られるようになった<sup>3</sup>。

レスターの移民の歴史や多民族都市レスターの近況について英語で執筆

した著書や論文は多数存在するが、日本語で論じたものは数少ない<sup>4</sup>。注目すべきものは、明治大学の佐藤清隆教授による聞き書きの手法を用いた精力的な研究並びに出版活動である<sup>5</sup>。同教授はレスター大学の歴史学部  
に訪問教授として1年間在籍した時に、同市の移民研究の重要性を認識し、それ以降10年以上に亘り、同市に住む移民を対象にした聞き書き調査を行ってきた。この中でも特に重要とみなした聞き手7人のライフ・ストーリーをテープおこしたものが、既に7冊の英語の小冊子として出版されており、書評なども書かれ、英語圏で注目されている。

本稿ではまずレスターの移民の歴史を簡単に紹介し、多民族都市への発展過程を考察したい。次に現在レスターに住む少数民族の内訳、その多くが就いている職業、社会活動並びに文化活動などを取り上げ、多文化都市レスターの特徴や同市が抱えている問題の真相究明も試みるつもりだ。更に歴史家である佐藤教授の研究分野には含まれていない、同市における移民のための英語教育についても論じてみたい。このテーマについて日本語で言及したものは、私の知る限りでは存在しない。そこで本稿では、レスターにおける移民のための英語教育の主な目的についてまず論じ、次にカリキュラム、教授法、使用教材などに着目し、その教育成果についての評価及び分析を試みたい。最後にレスターの移民の英語教育の事例を日本における英語教育においても生かすことが可能であるかどうか、もし可能であるならば、その効果的な活用法とはいかなるものかについても追究できればと思う。

私事で恐縮だが、私はレスター大学で M.Phil. (修士) 号を取得するため、2年半余りレスター市で暮らした経験がある。その間レスター州立の成人学校に私は初の日本語コースを設置し、非常勤講師として地元の人々に日本語を教えていた。インド人やパキスタン人の移民もこのクラスを受講し、私は初めて移民たちと接する機会を得た。修士号取得後、私はシェ

フィールド大学の東アジア学部専任講師として勤務することになったが、レスター市の教育機関とのコンタクトは、その後も続いた。そんなわけで2003年にレスター州立のレスターカレッジにおける移民のための英語コース担当教員の審査委員に抜擢された。日英両国において英語を第二外国語として教える教員免許を取得していて、シェフィールド大学で日本語部門のコーディネーターを務めていた私の経験が買われたものと自負している。

このため、私は2年余り移民のための英語の授業を数多く参観し、担当教員や学生たちとも直接話す機会に恵まれ、授業の長所、短所、問題点を目のあたりにした。本稿ではこの貴重な体験を通して得た、文献などからは知り得ない情報や、2014年夏に渡英し、レスターに滞在した際、移民の英語教育に携わる教員の聞き書き調査によって入手した最新情報もふまえて、今まで紹介されたことのないレスターにおける移民の英語教育の実態に迫ってみたい。

## レスターの概略

レスターはロンドンのセント・パンクロス駅から車で1時間あまり北に行った、英国中東部に位置している地方都市で、2011年4月に実施された国勢調査によると、同市の人口は30万人で、英国で現在10番目に大きな都市である。レスターは古代ローマ時代に建てられた歴史ある都市で、同市の中心部に位置するJewry Wallと呼ばれる遺跡がローマ時代の歴史を物語っている<sup>6</sup>。レスターは、旅行代理店のトーマス・クック社の発祥地としても有名であり、彼の業績を称える銅像がレスター駅前に立っている。最近では、リチャード3世の遺骨が市内の駐車場からレスター大学の考古学部の研究チームによって発掘され、国内外で大々的に報道された。

この地域の主な伝統的産業は、靴下、メリヤス類、ニットウエアなど

の繊維産業、靴製造業、エンジニアリング、印刷業であった。1920年代には、レスターは靴の製造、流通の中心地であり、編み物製品の最大の生産地でもあった<sup>7</sup>。そのため英国連合製靴会社（British United Shoe Machinery Company）のような大工場や小規模な靴下や編み物工場がこの地域に多く存在していた。1980年代から靴、靴下、編み物といった伝統的な産業は徐々に衰退し近年ではこれらの製品が、中国、インド、パキスタンなどでずっと安く生産されるようになったため、消滅の危機に瀕している。その結果こういった製造業に代わって、最近では商業、特にサービス業が盛んになった。同市にあるレスター大学、デ・モンフォート大学および国民保険サービス（NHS）の3つの大病院が、現在この地域の大きな雇用主となっている。また同市はスポーツも盛んで、ラグビーチームのレスター・タイガース、サッカークラブのレスター・シティ、バスケットボールチームのレスター・レイダースのスポーツクラブが本拠地を置いている。

近年のレスターの一番の特徴はその多民族性で、英国一の多民族都市となっている。特にレスター市の中心部から車で5分の北部近隣移住地区のベルグレイブ（Belgrave）地域を訪れると、インドの町にいるのではないかと錯覚を起こすほど多くのインド人、パキスタン人が居住し、白人の姿はほとんど見かけない。ベルグレイブ地区の他にも、多くのインド人、パキスタン人が市内のハイフィールド、エビントン地区、アビィ地区、ラティマー地区、ラシュ・ミード地区に住んでいる。しかも裕福なビジネスマンや専門職に就く南アジア人は、以前はアッパー・ミドルクラスの白人に占められていたストーニーゲート地区、ナイトン地区、オッドビー地区にも数多く移り住むようになった。

## レスター市の移民の歴史

前述したようにレスターは、英国で初めて少数民族の人口が50%を超

えた都市として知られているが、インド、パキスタン、バングラデッシュといった南アジアからの移民数が極めて多いことも大きな特徴であり、移民の歴史はレスターの変化を物語るものでもある。レスター移民の歴史は第一次世界大戦中に遡る。大戦が始まり、ドイツ軍のベルギーにおける占領から逃れるため、24万人にも及ぶベルギーからの難民が英国に亡命し、レスターにもやって来た<sup>8</sup>。1920年代になると、前述したように、レスターが靴、編み物製品の中心地になったことで、こういった工場では大勢の労働者が必要となり、アイルランド、東ヨーロッパなどからの白人の移民が職を求めてレスターにやって来た。第二次世界大戦が勃発すると、ナチスに占領されたポーランド、ベルギー、オランダ、フランスなどのヨーロッパの国々からの難民とドイツ、オーストリアに住んでいたユダヤ人の難民が20万人以上も英国に亡命し、レスターにも多くが住むようになった<sup>9</sup>。加えて英国軍に入隊していたポーランド人の負傷兵が治療のためレスターに送られ、回復後も引き続きレスターに住むことが許可され、戦後、定住するものが多かった。1945年以前のレスターの移民は、ヨーロッパやソビエト連邦出身の白人がほとんどで、インド、パキスタンからの移民をレスターで見かけることはほとんどなかったそうだ<sup>10</sup>。

戦後英国経済が急成長するにつれて、極度な労働者不足に悩まされることとなった。とりわけ1940年代後半から1950年代にかけて人手不足が深刻化したのは、肉体労働を伴う仕事、鉄道、ロンドンの地下鉄やバスなどの交通機関や工場など、低賃金で、長時間労働を強いられる交替制の職種だった。問題解決のため、英国政府は、はじめアイルランドや第二次世界大戦中英国の連合国であったヨーロッパ諸国から労働者を募集したが、それだけでは到底人手不足を補えず、敵国であったドイツやイタリアからの労働者も受け入れざるをえなかった<sup>11</sup>。その結果イタリアの貧しい田舎から工員や家事奉公人として働く数多くの女性たちがレスターにやって来

た。しかし戦後国営化した英国鉄道（British Rail）や1948年に新しく設置された国民保険サービス（NHS）においては、絶えず働き手が足りなかった<sup>12</sup>。そのため政府は、旧英国植民地の西インド諸島に労働者募集のポスターを送るなどして本格的な求人活動を開始した。

英国は最盛期の19世紀後半から20世紀前半にかけて、アジア、アフリカ、西インド諸島の多くの国々を植民地化し、地球上のほぼ6分の一の領土を所有するに至り、大英帝国と呼ばれるようになった。しかし第二次世界大戦後、インド、パキスタンを初めとする多くの植民地が独立し、大英帝国は解体したが、旧英国植民地の国々は英連邦に加盟し、英国と密接な関係を維持した。また1945年よりずっと以前から、旧大英帝国で生まれた者は、誰でも英国並びに英国旧植民地において同じ市民権を持つという法律が英国には存在していて、1948年に施行された英国国籍法（The British Nationality Act）はこの法律を更に強化し、旧英国植民地諸国出身者の英国移住を容易にした<sup>13</sup>。

ニック・キンバー（Nick Kimber）は、「1948年以前も英国旧植民地出身の有色人種者が英国に移住することは容易に出来たにもかかわらず、その権利を利用する者がほとんどいなかったため、英国政府は西インド諸島から多くの人々が仕事を求めて英国に渡って来るとは夢にも思わなかった」と述べている<sup>14</sup>。しかし政府の予想に反して、労働者募集の求人広告のポスターは、西インド諸島において大きな反響があった<sup>15</sup>。当時西インド諸島の国々では不景気が続き、失業率が高かったからだ。また西インド諸島の人々の英国に対する印象はすこぶる友好的で経済的に繁栄している国と高く評価していたので、安定した仕事と、より豊かな生活を求めて移住を決意した。このような経緯で、1950年代に西インド諸島から多数の人々が英国に渡ってきて、そのうちの一部がレスターに定住し、交通機関、エンジニアリング、工場、倉庫関係の仕事に就いた。



西インド諸島からの移民に続いて、1950・60年代になると、第二次大戦後独立し、新しく英連邦に加盟した旧英国植民地のインド、パキスタン、バングラデシュなどのインド亜大陸の国々からの南アジア系移民が増加した<sup>16</sup>。かれらは西インド諸島の人々同様、自国より遥かに高い賃金と生活の安定を求めて祖国をあとにし、多くはレスターに定住した。レスターに引き寄せた主な要因は、当時においても織物、靴下、靴などの産業が健在で、低賃金の労働者を必要としていたからだ。また新しい小規模製造業、印刷業の分野においても人手を要していた。更にレスターには家賃の安い住宅も多く、移民が住みやすい条件が整っていたことも理由の一つとしてあげられる。

1960年になると、英国政府の予想をはるかに越えた大量の移民が英国に定住したため、政府は移民の数を減らすため、英連邦からの移民の英国入国の権利を制限し、英国で働くには必要書類提出を義務付ける英連邦移民法（Commonwealth Immigration Act）を1962年に施行した<sup>17</sup>。レスターでも施行前の1961年までに英連邦からの移民の数は4,624名にまで増加した<sup>18</sup>。

1960年代の後半になると、東アフリカでは、ウガンダが1962年に、ケニアが1963年に独立したことに伴い、こうした国々に住んでいたインド人は排除される憂き目にあった<sup>19</sup>。かれらはケニアやウガンダなどが英国の植民地支配下にあった時代にインドから移住し、多くが事業を営み、経済的にも潤っていたため、アフリカ人から疎まれる傾向にあった。1966年にケニアがまず、英国パスポート保持者のケニアへの入植廃止を実施した。これに伴い、ケニア在住の英国パスポート保持者のインド人移民はアフリカ人の迫害を受けるようになり、身の安全のため英国へ大移動した。避難民の母国インドの親戚、友人が、既に多数英国で暮らしており、レスターに住む者も多かったため、親戚、友人を頼って避難民がレスターに移



住してきた<sup>20</sup>。1971年の人口統計調査によると、同年のレスターの移民数は1961年の約4.5倍に相当する20,190人にまで増加した<sup>21</sup>。

その後1971年2月、ウガンダの軍人イディ・アミンが、母国の大統領に就任し、その6か月後の同年8月5日には、特筆すべき事件が起きた。それまで母国で資産を蓄え経済力を保持してきたアジア人を快く思っていなかったアミンは、自国経済をアフリカ人に取り戻す政策を突如として打ち出し、ウガンダ在住の約8万人のアジア人に対し、90日以内に強制国外退去命令を発令した<sup>22</sup>。この事件は世界に波紋を投げかけたと同時に、レスターにも動揺が走った。バーミンガム (Birmingham)、ブラッドフォード (Bradford)、イーリング (Ealing)、ブレント (Brent)、レスターは、1971年までに既に多くの移民を受け入れていたが、レスター以外の市議会は従来通り、ウガンダからのアジア人を受け入れた。しかしレスターではこの問題を深刻な事態と捕え、市議会はウガンダからのアジア人を何とかしてレスターに来させないようにする策を講じた。というのもこの時点で、レスターでは東アフリカからの多くの移民に対する教育、社会、保険事業の分野は、既に限界状態に達していたからだ。市議会はウガンダからの移民は到底受け入れられないと判断し、知恵を絞った末、1972年9月17日付のウガンダの新聞『ウガンダン・アルグス』に下記のような広告を掲載した。

AN IMPORTANT ANNOUNCEMENT ON BEHALF OF THE COUNCIL  
OF THE CITY OF LEICESTER, ENGLAND

The City Council of Leicester, England, believes that many families in  
Uganda are considering moving to Leicester.

If you are thinking of doing so it is very important you should know that  
PRESENT CONDITIONS IN THE CITY ARE VERY DIFFERENT  
FROM THOSE MET BY EARLIER SETTLERS. They are:

HOUSING – several thousands of families are already on the Council's waiting list.

EDUCATION – hundreds of children are awaiting places in schools

SOCIAL AND HEALTH SERVICES- already stretched to the limit

IN YOUR OWN INTERESTS AND THOSE OF YOUR FAMILY YOU SHOULD ACCEPT THE ADVICE OF THE UGANDA RESETTLEMENT BOARD AND NOT COME TO LEICESTER.<sup>23</sup>

「イングランドのレスター市議会からの重要なお知らせ」

イングランドのレスター市議会は、ウガンダ在住の多くの南アジア系の家族がレスターへの移住を考えていると推測する。極めて重要なことだが、そうであれば、現在同市に住む移民の状況は、初期の移住者たちの状況とは様変わりしていることを知っていただきたい。たとえば住宅状況について言えば、数千人の家族が既に市営の公団住宅への入居待ちリストに名を連ねている。教育部門では、何百人もの子供たちが、定員オーバーで学校に入学できずにいる。社会、保険サービス部門では既に限界に達している。従ってあなた自身、および家族のためにも、ウガンダ再移民委員会のアドバイスを受け入れて、レスターに来るべきではない。

この広告は、レスターの市議会の本来の意図に反し、皮肉にも逆効果をもたらした。それまでレスターという地名を耳にしたこともなかったウガンダのアジア人まで、この広告により、レスターに着目し、同市への移民を考えるようになってしまったのだ。行き場のない英国パスポート保持者のアジア人 23,840 人がウガンダを出国し、英国に避難し、その多数がレス

ターに住み着いた。前述したように、レスターには1950・60年代に、南アジア、東アフリカからのアジア人が既に中心部に近いハイフィールドズ（Highfields）地区に数多く住んでおり、小さなアジア居住区を形成していたため、ウガンダからの避難民も安心して暮らしていけると思ったのだ。その結果1981年の人口統計調査によると、英連邦出身のレスターの移民数は、1971年の20,190人から1981年の59,709人と約3倍にまで増加した<sup>24</sup>。それ以後も特にアジア人の人口は増え続け、2007年のレスターに住む少数民族の26%は、インドのグジャラート地域出身及びウガンダ、ケニアなどの東アフリカからきたグジャラート・インド人だった<sup>25</sup>。

2000年になるとレスターは、英国への新来者を迎え入れる都市という評判が不動のものとなり、現在様々な国々からの移民、難民、政治的な亡命者が暮らしている。たとえばアフリカのソマリア政府が1991年に崩壊した後、武装勢力が各地に割拠し、無政府状態となり、内戦が続いたため、同国からの難民が数多くレスターにやって来た<sup>26</sup>。また1980年にセルビア共和国憲法が修正され、コソボの自治権が剥奪されたことが契機となり、コソボ解放軍とセルビア治安部隊間でコソボ紛争が起き、長期化した。その結果、コソボからの難民が英国に流出し、レスターに安住の地を求める者も多かった。加えてアフガニスタン、ジンバブエ、イラン、イラクなどアフリカや中東の国々からの移民、難民も数多くレスターに住むようになった<sup>27</sup>。更にポーランド、スロヴァキア、ルーマニアなどの東ヨーロッパ諸国がEUに加盟してからは、これらの地域からの移民も増え、現在約5000人のポーランド人がレスターに暮らしている<sup>28</sup>。

## 多民族、多文化都市レスター

レスターに住む移民並びに避難民の数はさらに増加し、2001年の国勢調査では、レスターの人口279,921人のうち、39.5%が英国外出身の移民

であった<sup>29</sup>。移民の出身国並びに地域別の内訳は、インドが25.7%、パキスタンが1.5%、バングラデッシュが0.7%、アフリカが1.2%、西インド諸島が1.7%であった<sup>30</sup>。その他にレスターで暮らす少数民族の出身国は、中国、ベトナム、ポルトガル、トルコ、ポーランド、ウクライナ、リトアニア、ロシア、セルビア、コソボ、スロヴァキアであった<sup>31</sup>。そして様々な国々から移住、亡命してきたユダヤ人もレスターに数多く住んでいるが、同市の移民人口の中でインド人が占める割合は英国中で一番大きい<sup>32</sup>。

そしてレスターの居住者は、14種類もの異なる宗教を信仰しており、キリスト教の教会、ロシア正教会、ギリシャ正教会、イスラム教のモスク、ヒンズー教の寺院、シーク教徒の祈禱所、ユダヤ教会堂、ジャイナ教の寺院などの礼拝所がある<sup>33</sup>。

レスターで話されている言語の数は、英語以外に70か国語を上回る<sup>34</sup>。同市の人口の91%が通例英語を話しているというデータもあるが、16%は、グジャラート語を、3%がパンジャブ語を、3%がソマリ語を、2%がウルドゥー語を日常生活で主に話しているそうだと<sup>35</sup>。他にもヒンズー語、ベンガル語、シレット方言（ベンガル語の方言）、アラビア語、中国語、ロシア語、スワヒリ語、ポーランド語などが使用されている。またレスターにある初等学校（primary schools）に通学する45%の生徒の母語は、英語以外の言語である<sup>36</sup>。

食文化も多様で、レスターにはフランス、イタリア、ギリシャ、キプロス、トルコ、ポーランド、ロシア、中国、韓国、日本、タイ、ベトナム、インド、パキスタン、西インド諸島、アフリカ料理のレストランやデリカテッセン、テイクアウトの店が点在している。少数民族が日々食する民族料理に必要な食材やスパイスが、地元のスーパー、八百屋、中心部の市場で売られている。

また前述したベルグレイブ地区は、近年アジア移民の商いの中心地とし

て栄え、かれらが経営する貴金属店、インド婦人の民族衣装サリーの販売店、インド、パキスタン料理のレストランやデリカテッセン、テイクアウトの店が軒を連ねている<sup>37</sup>。実際英国全土から数知れないアジア系の客が、貴金属やサリーを購入したり、インド、パキスタン料理目当てに頻繁にベルグレイブ地区を訪れ、レスターの経済発展に大きく貢献している<sup>38</sup>。

加えてこの地域では、ベルグレイブ・メラ（Belgrave Mela）と呼ばれる、インドの伝統的な収穫祭や、ヒンズー教のディワリー（Diwali）と呼ばれる富の女神にささげる灯明の祭も毎年開催される<sup>39</sup>。後者はインド以外で祝うディワリーの中で最大級のもので、6万人もの群衆を集めているという<sup>40</sup>。そしてレスター市内のヴィクトリア公園（Victoria Park）では、カラビアン・カーニバルも毎夏行われ、レスターを初めバーミンガム、ノッティンガムなど中部地方に住む西インド諸島出身の移民たちが集い、色鮮やかな民族衣装に身を包み、陽気な音楽にあわせて、踊りながらレスター市街を練り歩く<sup>41</sup>。

更にレスターは英国における南アジア文化の中心地としても近年有名になった。グジャラート語、パンジャブ語、ウルドゥー語などの南アジアの言語で放送するラジオ局があり、南アジアのダンス、音楽、劇などが定期的に公演される劇場も2つある<sup>42</sup>。南アジアの舞踊を専門とする複数の舞踊団が本拠地を置き、近年では国際的な評価を得ている。市内やベルグレイブ地域にある映画館では、南アジアの映画も常時上映され、南アジア系住民のためのコミュニティー・センターなどもある。また特筆すべきことは、レスターが、南アジア諸国との重要な文化交流の役割を担っていることだ。たとえばインド、パキスタン、バングラデッシュからの俳優、歌手、作家、詩人、画家など数多くのアーティストが頻繁に訪れ、公演、リサイタル、講演会を催し、同市在住の南アジア系移民たちと活発な文化交流を行っている<sup>43</sup>。

## 多民族都市として最も成功を収めたレスター

前述したように、レスター以外にも英国にはロンドンをはじめ、いくつかの多民族都市が存在している。しかしこういった都市では民族や宗教をめぐる争いが繰り返され、有色人種に対する白人による人種差別などが職場などで頻発し、暴動やテロ事件なども発生した。なかでもロンドンの南部のブリクストン（Brixton）で1981年に起こった暴動は凄まじいもので、何百人もの主に黒人の若者たちが大暴れし、何十もの店やオフィスが灰と化し、リバプールなどの地方都市にも暴動が広がった<sup>44</sup>。近年では2011年夏にロンドンで暴動が始まり、バーミンガム、ノッティンガム、マンチェスターなどの多民族都市に拡大した。過去レスターにおいても、1974年にレスター大英帝国タイプライター会社で、アジア系の工場労働者が、会社側の極度な人種差別に抗して、ストライキを決行し、紛争になった<sup>45</sup>。また過去にはその地域の労働組合がアジア人側を支持しないという事例もあった。1982年には失業中の少数民族の若者たちが不満を爆発させ、レスターのハイフィールズ地区を中心に暴動を起こした<sup>46</sup>。

しかし最近レスターではこういった問題はほとんどなく、同市は民族、宗教間の関係において近年「比較的調和のとれた多民族都市」として注目されている。実際2006年にレスター市議会の要請をうけて実施されたベスト・ヴァリュー・ジェネラル調査（Best Value General Survey）によると、84%のレスター居住者が、「同市は様々な国の出身で全く異なったバックグラウンドを持つ人々が共存し、理想的な共同体を維持している」<sup>47</sup>。加えて2005年の同調査から、77%のレスター居住者が、レスターに満足していることが分かった<sup>48</sup>。またこれらの統計のデータから、レスターの住民の中でも特に少数民族からの肯定的な回答は注目に値する。例えばかれらの多くは、レスターに帰属意識を抱いていると答えていた<sup>49</sup>。こういった貴重なデータから、レスターが多民族都市、多文化都市として成功を収

めていることが明らかになった。更に同市居住の多くの白人たちも、レスターの多民族性、多文化性、多宗教性に好感を抱いていることも判明した。

次にレスターが多文化都市として成功を収めるようになった理由を考えてみたい。英国では、1976年に人種関係法（Race Relations Act）が施行され、教育、雇用などの分野での人種差別は違法となった。しかしこの法律の導入後も、英国各地で依然として人種差別が原因の暴動が続いた。しかしレスターでは市議会が中心となって人種差別を撤廃することで暴動が起きないように努力してきた。1980年代初め、少数民族に対して極めて好意的な、左翼の労働党が市議会の与党となり、レスター在住の多民族が白人たちと共存できる極めて平和な多民族都市形成を目指し、様々な方策を積極的に採用した<sup>50</sup>。

まずレスター市議会は、英語を話さない移民たち、特に年配の人たちに対して、行き届いたサービスを提供した。例えば市議会が地元の人々に配布するちらし、ニュースレターや他の印刷物は、通常英語、グジャラート語、パンジャブ語、ウルドゥー語、ヒンズー語で書かれている<sup>51</sup>。地元の国民健康サービス（NHS）の病院は、グジャラート語、パンジャブ語、ウルドゥー語、ヒンズー語を話す医師、看護婦を数多く雇い、南アジア系の英語を話さない移民たちも安心して治療が受けられるよう配慮している<sup>52</sup>。学校、裁判所でも、前述した南アジアの言葉を話す教師、弁護士を雇用している。加えて市議会は英語を話さない移民のために、無料の通訳、翻訳や様々な宗教礼拝のサービスも提供している。前述したような少数民族の祭り、音楽、芸術、ファッション、スポーツを含む少数民族の文化活動にも、市の財政から多額の資金援助をしている<sup>53</sup>。こういった文化活動には、少数民族だけでなく白人たちも積極的に参加し、各々が他民族の様々な異文化、さらには双方への深い理解を促している。

また1973年に初めて少数民族の中から市議会議員が選出され、その数



は 2011 年には 17 人に達し、レスターの全市議会議員の 31% を占めるまでになった<sup>54</sup>。これは、英国全土における少数民族議員が各地の市議会議員に占める平均的割合、4% に比べると遥かに高い<sup>55</sup>。

レスター州立の公共図書館には、グジャラート語、パンジャブ語、ウルドゥー語、ヒンズー語、中国語などで書かれた書籍や南アジアの音楽、舞踊、映画の CD、DVD などが数多くあり、貸し出しもしている。加えて英語を母語としない移民たちのために英語、簡単な情報テクノロジー (IT)、就職に必要な技術や訓練を提供するコースが、市議会から資金援助を受け無料か安い授業料で、地元の成人学校 (Adult Education Centre) やカレッジなどで一年中開講されている<sup>56</sup>。このように市議会の少数民族に対する行き届いた政策と活発な活動により、レスターに住む白人と少数民族との共存が実現し、英国において最も成功を収めている多民族都市という評判を得ている。

### レスター市における移民の英語教育

移民の数が英国全土の都市で増加する一方、英語を母語とせず、英語をほとんど話せない移民の数も増えてきた。1990 年末に実施された英国政府の調査で、同国に住む英語が母語でない成人移民は 100 万人以上で、英語の読み書き、簡単な算数が出来ないことが明らかになった<sup>57</sup>。更に同調査から、英語を母語とする 600 万人以上の成人も、読み書き、簡単な算数が出来ないことが判明した。そこで政府はこの問題の対処策として、Adult Basic Skills Strategy Unit (成人のための基礎的な技能養成戦略部門) を 2001 年 3 月に文部省に設置した<sup>58</sup>。この部署では、まず英語の読み書き、簡単な算数が出来ない成人のための基礎教育や英語を母語としない成人のための英語教育教材の開発に取り組んだ。次に、基礎学力養成講座や英語が母語ではない人たちのための英語講座を全国に新設、増設するよう

強く要請した。その結果、レスター州の教育委員会は、移民の英語教育に特に力をいれるようになり、ESOL (English for Speakers of Other Languages) の講座が急増した。本稿の後半ではレスター州における移民のための英語教育に焦点を絞って論じてみたい。

レスターの Leicester Adult Education College (レスター成人学校) と市内に4つのキャンパスをもつ、日本の高等専門学校に相当する Leicester College (レスターカレッジ) は、2001年以降、移民のための英語講座を開講している。後者には Outreach Department (アウトリーチ) もあり、キャンパス内で移民のための英語の授業をするだけでなく、会社、公民館、教会などでもこのカレッジの教師が出張授業を行うシステムも導入している。レスター市外の Beauchamp College (ビーチャム・カレッジ) や South Leicestershire College (サウス・レスタシャー・カレッジ) でも移民のための英語コースを設けている。この移民のための英語コースは、英国政府から多額の資金援助を受けて10年以上に亘り開講している。EU からレスターに移り住んだ者、避難民あるいは移民としてレスターに定住し、永住権を持つ者はこのコースを受講でき、受講者の収入に応じて授業料が異なる。コース登録の際には、パスポートや永住権を証明する書類などを提示しなければならない。

## レスター州の移民のための英語コースとカリキュラム

次に英語のコースの詳細について紹介したい。Leicester Adult Education College の移民のための英語コースでは、Pre-Entry、Entry 1、Entry 2、Entry 3、Level 1、Level 2 の6つのレベルに編成されている<sup>59</sup>。Pre-Entry は英語を全然話することが出来ない全くの初心者向けで、Entry 1 は、初心者あるいは英単語が少しわかる程度、Entry 2 は、英語が少し話せる程度、Entry 3 は、英語をある程度理解し、話し、書くことが出来る中級レベル、

Level 1 は英語がよく理解でき、話せ、書ける人のための中上級レベル、Level 2 は、上級レベルとなっている。Level 2 のクラス受講者の最終目標は、National Test in Literacy に合格することで、このレベル以外の学生は、各々のレベルの Trinity ESOL Skills for Life の試験に合格することである<sup>60</sup>。

Leicester Adult Education College では、英語コース以外にも、移民のための Beginners' Computing Skills（初心者向けのコンピューター技術養成講座）、Driving Theory Test Preparation（運転免許の筆記試験受験準備講座）、ESOL and Family Health（家族が病気になった際役立つ英語を学ぶ講座）、Effective Communication for International Nurses（英語を母語としない外国人看護婦が患者に接する場合必要となる英会話とコミュニケーション能力向上を図る講座）、Citizenship Test（英国の市民権を取得する際、義務づけられる英語の語学力と英国に住むにあたって必須の同国の社会、文化、歴史、政治などの常識度を試す試験対策コース）も開講している<sup>61</sup>。

Leicester College でも Leicester Adult Education College 同様、移民のための英語コースは6つのレベルに編成され、初級レベルの学生は日常会話の基礎を学習する。中級レベルの学生の学習目標は、実践英語の習得である<sup>62</sup>。たとえば、病気で医師を受診する時や病院に入院した場合、医師や看護師とコミュニケーションできる会話、民生委員（ソーシャル・ワーカー）との会話、就職試験の面接で必要な会話などをこのレベルの学生は習得する。上級レベルの学生の最終目標は、Cambridge Proficiency Exam（ケンブリッジ検定上級レベル）などハイレベルな英語の資格試験に合格することである。ちなみに英国大学入学の際、通常留学生に課される英語の必要条件は Cambridge Proficiency Exam 合格レベルである。

Leicester College では、通常の英語コースの他にも、英語集中講座やケンブリッジ検定試験受験対策講座なども開いている。また Leicester Adult Education College 同様、英語コース以外にもコンピューターの基礎知識を

提供する Text Processing/Word Processing with English などのコースや、オフィスで働く際、必要となる英語や専門知識を教授する English and Office Skills のコース、英語を学びながら裁縫の技術も伝授する English with Sewing/Craft と題するコース、子供や老人の世話をする仕事に就こうと考えている人向けに、仕事の内容を説明し、この仕事に必要なとなる基本的な技術を教え、更にこの分野の求職活動のやり方まで伝授する Child and Community Care コースなども開講している。

Leicester Adult Education College と Leicester College で開講される移民のための英語コースは、9月の初めに新学期が始まり翌年の7月半ばまで、クリスマス、イースター休暇を除いて、3学期に亘って授業が実施されている。受講生は、1週間に5～7時間の授業に出席することが義務付けられており、2学期、3学期の初めでも空きがあれば新入生を受け入れている。まず申込用紙の簡単な英語の質問に英語で記入すると、このコースへの入学が仮申請される。その後、このコースの責任者から英語の面接を受け、結果次第で入学が許可される。入学が確定した学生は、diagnostics assessment test（英語診断能力評価テスト）と呼ばれる各学生の英語力を正しく把握するために簡単な筆記試験を受ける<sup>63</sup>。その結果に基づき、各学生を最適なレベルに選別する。その際レスターでは受講生の宗教も考慮し、学生の意向も聞いた上で、慎重にクラス分けがなされており、宗教上の理由から男女別のクラスも設けている<sup>64</sup>。

## 受講生の国籍

前述した英語コースでは、どこの国々からの移民たちが学んでいるのか。学生たちの出身国は、南アジアのインド、パキスタン、スリランカ、バングラデッシュやアフリカのアンゴラ、アルジェリア、エチオピア、ウガンダ、エジプト、スーダン、コンゴ、ソマリアや中東のイラン、イラク

や東ヨーロッパのコソボ、セルビア、ポーランド、ルーマニアや中央アジアのアフガニスタンやロシアや中国、モンゴルなど25か国以上の国々にも亘る<sup>65</sup>。受講生の母語は、グジャラート語、パンジャブ語、ウルドゥー語、ヒンズー語、ベンガル語、シレット方言、アラビア語、ソマリ語、スワヒリ語、フランス語、ギリシャ語、ポーランド語、トルコ語、ロシア語、中国語を含む60か国語にも及ぶ<sup>66</sup>。また受講生が信仰している宗教も、キリスト教のプロテスタントとカトリック、ユダヤ教、イスラム教、仏教、ヒンズー教、シーク教、ジャイナ教と様々である<sup>67</sup>。

### 移民のための英語クラスの担当教員に必要な資格

次にどんな教員が、移民の英語の授業を担当しているかを報告したい。各々のカレッジには、移民のための英語クラスの責任者であるコーディネーターがいて、フルタイムで働き、カリキュラムの編成、学生受け入れ時の面接、他の英語教員の選抜、人事管理に当たっている。一方で実際に教壇に立つほとんどの教師は、パートタイムで雇われている。

それではこの英語クラスの教員になるためにはどういった資格が必要なのだろうか。英国では大卒であれば、私立学校の教師になれるが、公立学校の教師になるには、大学卒業後にPGCE (Postgraduate Certificate of Education) という教員養成を専門とする大学院での1年間の教員資格を取得するコースを修了しなければならない<sup>68</sup>。また英国の大学教員の大多数は、博士号取得者である。しかし成人学校、高等専門学校の教員は、大卒でない場合もある。特に日本語、中国語、韓国語などの少数言語の多くのコースは、過去に、大学も卒業していない、教員資格も持たない、英国に長年住んでいるこれらの言語を母語とする人々によって教えられてきた。

一方でLeicester CollegeやLeicester Adult Education Collegeで当初移民の英語教育に携わっていた教員は、大学で英文学、英語学、教育学などを専

攻した人、教員資格取得者、英国の私立または公立の学校で英語を教えた経験のある者が半数以上を占めていた。しかしなかには、大卒でない教師もかなりいたが、これらの教師は、CELTA (Certificate in Teaching English to Speakers of Other Languages) や DELTA (Diploma in Teaching English to Speakers of Other Languages) の資格は持っていた<sup>69</sup>。だが2005年の春、英国文部省は、英国全土で移民のための英語コース (ESOL) を担当する翌年度からの教員の採用条件を、大卒以上で、CELTA と CELTA 6 の両方の資格を有する者と改めた。この改正に伴い、それ以前に職に就いていて、大卒でない教師は、所属するカレッジから資金援助を受け、仕事をしながら大学に通い、学位を取ることが義務づけられた<sup>70</sup>。この改正は移民のための英語コースの教師の質をより高めるために採られた策であった。

英国では2～3年に1回、インスペクションと呼ばれる監察があり、文部省あるいは州の教育委員会から派遣されてきたインスペクターが授業参観し、授業の内容がシラバスと一致しているかどうか、また教員が適切な授業を行っているかどうかを確認する。適切な授業が行われていないと判断された場合には、教員に教授改善を警告し、更なるトレーニングを積むように助言し、授業の水準の更なる向上を図るよう要請するというかなり厳しいシステムを導入している<sup>71</sup>。

インスペクションに備えて、レスターの英語教育に携わっているカレッジでは、メンター制度 (mentoring system) を導入している。教授経験豊かな mentor (メンター) が、各々の教師の授業を定期的に参観し、授業内容、学生たちの授業参加度や貢献度などを観察し、学生並びに担当教員とも話し合った上で、その授業の完成度や教員の能力を吟味し、詳細な報告書を作成する。その報告書では担当教員の長所、弱点などが指摘され、更なる授業改善のための助言がなされる。担当教員は報告書を基に、自分の弱点を理解し、その克服に努め、担当授業の効率化をはかり、学生の学

力並びに担当クラスのレベルの更なる向上を目指す。私も Leicester College の移民の英語教育担当の幾人かの教員のメンターの役を務め、実際に授業を参観し、報告書を書いた経験もある。非常に時間を要する制度であるが、担当教員の質を高めるという点では、極めて有効である。

### 移民のための英語のクラスの教授法

レスターの移民の英語クラスではどのような教授法が用いられているのか。どのクラスも direct method（直接法）を用いて、英語だけで授業が行われている。英国では primary schools（初等学校）や secondary schools（中等学校）では、フランス語、ドイツ語、スペイン語などの外国語の授業はすべて直接法を用いているため、教員はネイティブ・スピーカーであるなしにかかわらず、通常担当している言語だけを用い、学生たちも授業中は英語を話すことが禁じられている<sup>72</sup>。こういった外国語の学習法は、極めて効果的であることが実証されており、移民のための英語コースも当然のことながらこれに倣っている。

Leicester Adult Education College でも Leicester College でも少人数制を導入しており、前者は1クラスの学生数は15人以下で、後者も20人以下である。どのレベルの授業でも、英語の4技能（読む、書く、聞く、話す）の向上を目指す授業計画が立てられている<sup>73</sup>。4技能の中でも一番重要視されているのは英語のリスニング力の向上で、ほとんどの授業は、教師と学生の間における英語の質疑応答から始まる。また毎回CDを学生に聞かせ、そのあと、○×（まるばつ）式の練習問題、穴埋め問題、英語の質問に英語で答える練習問題などをさせて、リスニング力の強化を図っている。

英語を話す練習としては、初級レベルでは、写真や絵の描写、与えられた様々なタスク（task）に従って英語で簡単な会話をする role play、二人一組になって様々な状況に置かれた時に必要となる会話の練習を行ってい



る。たとえば、道の聞き方、ホテルやレストランの予約の仕方、買い物など、各々の場面に必要な単語、表現、対話を練習する。宿題は、その日に学習した会話表現、たとえば買い物の仕方であった場合には、レストランの市場に行って、学んだ単語、表現を用いて、実際に買い物をするなど極めて実践的なものである。

中級レベルでは、自分の意見を英語できちんと述べる練習をしたり、グループディスカッションの技術や簡単なスピーチを修得させる。自分の感想や意見を述べるのに効果的な課題は、自分が感銘を受けた本の内容や感想を英語で発表させることである。上級レベルでは、まず討論、長いスピーチの練習を課している。次に情報の集め方や提供の仕方を教授した後、学生に老人問題など様々な社会問題を課題として与えている。学生はコンピューター・サーチなどの手段を講じて、その問題について執筆されている英語の資料を集め、講読し、理解した上で、その調査結果を英語で発表すると同時に自分の意見を述べ、更に問題解決策を提示するという高度な英語を話す技術の修得を目指す。

英語を読む練習は、初級レベルでは、まず flash cards（英単語を書いたカード）を瞬間的に見せて早く読み取り、単語を正確に発音する練習をしている。次に英英辞典の正しい使い方を説明し、わからない単語の意味を常に辞書で確認する習慣を身につけさせる。更に看板、チラシ広告、ポスター、ラベル、説明書などの authentic material（生教材）を用いて、簡単な英語を理解する練習を十分行っている。日本の英語教育と違い、教師による文法事項の詳しい説明や文法の置き換えドリルなどに費やす時間は極めて少なく、更に驚くべきこととしては、教師は授業中ほとんど文法用語を使用していない。中級レベルでは、手紙、メール、簡単な物語を読み、上級レベルでは、新聞、雑誌記事を教材として用いている。日本における翻訳中心の読解とは全く違い、教師が英語でテキストの内容について質問

し、学生たちがそれに英語で答え、理解度を確認した上で、中級レベル以上では、テキストに対する意見を述べさせ、クラス全体でディスカッションをするという授業方法が広く採用されている。

英語を書く練習としては、初級レベルでは、簡単な単語の綴りやディクテーション（簡単な英文の書き取り）の練習や申込書など簡単な書類の記入法も伝授している。語彙を増やすために、Crossword（クロスワードパズル）なども授業に積極的に取り入れている。

中級レベルでは、幅広いテーマについての英作文を学生に書かせ、また実用的な手紙、メールの書き方、履歴書の作成の仕方などの練習も併せて実施している。上級レベルでは、エッセイの書き方について教授し、学生はエッセイの構成、効果的な引用文の使用、自分の意見を英語で表現する方法、注の付け方、参考文献の作成などを学ぶ。

語学以外にも授業の中で、教員は英国の文化と社会を紹介するためクイズ形式を用いて、学生たちのレベルにあった質問を出題し、答えさせる。

## 学生の成績評価と学生の収めた成果

上記した英語のクラスでは、学生の進度をどのようにモニターしているのか。Leicester College では、どのレベルの学生も各々のコースが始まってから6週間ごとに簡単な筆記試験と口頭試問を受けることが義務づけられている。これらの試験の結果を基に、教師は学生の進度を把握し、成績が伸びた学生はグレードアップさせ、成績が芳しくない学生は降格させるシステムを導入している<sup>74</sup>。またコース終了の前に、学生は、将来の就職や進学に役立ち、国の認定を受け、全国で実施する試験を受験するように勧められる。Leicester College が推薦しているレベル別の試験は、Entry 1 では Pitman Basic Written Exam、Pitman Basic Spoken Exam、IELTS (International English Language Testing System) Bands 0-1 Exam、Entry 2 では Pitman Elementary

Written Exam、Pitman Elementary Spoken Exam、IELTS Bands 1-2 Exam、Entry 3 では CELS (Certificate in English Language Skills) Preliminary Exam、Cambridge Preliminary English Test、IELTS Bands 3-4 Exam である。

また Level 1 では Pitman Intermediate Written Exam、Pitman Intermediate Spoken Exam、CELS Vantage Exam、Cambridge First Certificate Exam、IELTS Bands 4-5.5 Exam、Level 2 では Pitman Higher Intermediate Exam、CELS Higher Exam、Cambridge Advanced Exam、IELTS Bands 5.5-7 Exam、Level 3 では Pitman Advanced Exam、Cambridge Proficiency Exam、IELTS Bands 7-9 Exam が学生の英語力を正確に把握するのに信頼のおける目安として用いられている<sup>75</sup>。またこの試験結果に基づき、教員は学生に適切な進学や就職に対する助言を与えている。

Leicester Adult Education College では、担当教員がコース開始以前に、各々の学生に相応しい学習プランを作成し、教員は毎回の授業終了後に各学生の進歩、授業貢献度などを記録し、小テストも頻繁に行っている。学期終了ごとに、教師は個別面談をし、進行状況を報告し、次の学期用の新しい学習目標を定めている。コース終了前には、国の認定を受けている各学生のレベルに相応しい Trinity ESOL Skills for Life の試験を Level 2 以外の学生は全員受験することが義務づけられている。Level 2 の学生は、National Test in Literacy を受けなくてはならない。Leicester College 同様、試験の結果に基づいて、教員は学生の就職、進学相談に臨む<sup>76</sup>。

次に学生たちは 1 年間でどの程度の進歩を収めているのか。Leicester Adult Education College の移民のための英語教育プログラムのコーディネーターによれば、Trinity ESOL Skills for Life 試験の合格率は、ここ 2、3 年の間に急上昇し、ほとんどの学生が合格するようになったそうだ。Entry 3 のコースを修了した移民の学生たちは、掃除人、工員、店員として働く者が多く、Level 1 を修了した学生の多くはオフィスワーカーとし

て働いているようだ。特に後者は、職場で常に英語を使う必要があるため、授業中学習した英語の技能が大いに役立っているとのことである。Level 2 のコースを修了する学生数は大変限られていて、その中でも大学入学に必要な A レベルのコースに入り、その後大学まで進学する学生は、ほとんどいないようだ。Leicester College においても、上級レベルまで進む学生数は極めて少なく、Entry 1、2、3 を修了したほとんどの学生がブルー・カラーの仕事に就き、Level 1、2 を修了した学生はホワイト・カラー（事務系）の仕事に就いているという。ともかくカレッジで学んだ実用英語、英語の履歴書の作成の仕方、就職面接の受け方は大いに役立ったと聞く。

### レスターの移民のための英語のクラスが抱えている問題点

レスターの移民のための英語のクラスは 2000 年以降増加し続け、目覚ましい発展を遂げてきたが、その一方で大きな問題も抱えている。2009 年のリーマンショックまでレスターの移民のための英語のクラスのほとんどが、政府から多額の資金援助を受け、大規模に運営され、移民、避難民は無料で受講することができた。そのため学生数も順調に増え続けてきた。一方で、2005 年春の段階で、政府の多額な資金援助がいつまで続くのかという不安が、担当教員の間で高まっていた<sup>77</sup>。もし援助が打ち切れれば、当然のことながら、コースは有料となり、生徒離れが進むと考えられてもいた。事実リーマンショック以降、こういった問題はかなり深刻化した。前述したように、リーマンショックを境に、英国経済は衰退し、その上ユーロ圏における財政破綻も追討ちをかけ、英国政府の財政は悪化する一方であった。2010 年 5 月に発足したデイビット・キャメロン率いる保守党は、自由民主党との連立政権を樹立し、自国の多大な財政赤字を少しでも減らし、一日も早く財政を立て直すため、思い切った緊縮財政案を短期間で試みようとする強硬策を講じた。例えば国民年金受給者年齢の

大幅な引き上げ、失業保険並びに他の福祉給付受給者の削減や見直し、国家公務員や地方公務員の解雇並びに減給、国家事業の資金削減あるいは打ち切りに踏み切った<sup>78</sup>。

こういった緊縮財政政策のしわ寄せをレスターの移民の英語のコースも受けたのは事実で、学生の収入に応じて、授業料が決定されるようになった。しかし無職の学生は、現在でも以前と同様無料で英語のコースを受講できる。レスターの ESOL のコースコーディネーターの話によると、政府の援助金の減少に伴い、コース数を減らし、一クラス当たりの学生数を増やすことにより、対処するしかなかったそうだと<sup>79</sup>。このような財政事情の下、ESOL のコースの 5 年先の発展すら見通しがたたず、1 年ごとに様子を見ながら運営していくしかないコーディネーターは嘆いていた。

また文部省は、初等学校、中等学校の全教科の授業ばかりでなく、ESOL のコースのカリキュラムもたびたび変更し、そのたびに、ESOL の教員も授業を新しいカリキュラム内容と一致するものに変えていかなければならない。また近年インスペクションもより頻繁になり、そのための学生の進歩を詳細に記す報告書を含むペーパーワークの量は増える一方であり、それが苦痛で退職する教員も増えているそうだと<sup>80</sup>。

Leicester College のアウトリーチのクラスの中には、学生のリクエストに応じて、リスニングとスピーキングの練習を主に行い、読み書きの練習をほとんどやっていないクラスが多い。例えば、レスターに 15 年以上も住んでいながら、英語がほとんど話せない中高年のインド人、パキスタン人の女性を対象としたクラスでは、大半の学生が、医者との会話、病院に入院した時や他の緊急事態が発生した時に要する英会話の習得だけを希望している<sup>81</sup>。そのため読み書きがほとんど出来ないままでコースを修了する生徒も多いのが実情だ。また 15 年以上も英国に住んでいる移民の学生の中には、英語を話したり、聞き取ったりするレベルは中級程度だが、読

み書きの力は初級レベルという英語の4技能が極端にアンバランスな者も多いので、こういったカテゴリーに属する学生のクラス分けは難しい問題だ。

加えて移民、避難民と一口に言っても、各々の学生の出身国、これまで母国で受けてきた教育、職業経験、家庭環境、信仰する宗教の違いが大きいため、英語のレベルだけでのクラス分けには無理が生じるのは当然である。特に受講生である移民が母国で受けてきた教育のレベルに大差があることは驚くほどだ。西ヨーロッパやポーランドからの移民の場合、自国で大学教育を受けた者も多い。一方で、インド、パキスタンなどの南アジアやアフリカからの移民の中には、母国でほとんど教育を受ける機会に恵まれず、母語でも文盲に近い状態の者がかなりいる<sup>82</sup>。それゆえ後者の英語教育にはかなりの時間を要する。

更に、ベルグレイブ地域、ハイフィールズ地域には数えきれぬほど多くの南アジア系の移民が居住し、自分たちのコミュニティを形成している。そのため、20年以上レスターに住んでいても、英語をほとんど話せないインド人やパキスタン人の中高年の特に女性が驚くほど多数いる<sup>83</sup>。各々のコミュニティに属している限り、英語を話す必要に迫られないからだ。前述したように、市議会が配布しているお知らせや新聞なども南アジアのいくつかの言語で印刷されているし、南アジアの言葉によるラジオ局もあるので、生活に必要な情報は英語を読めなくても、聞き取れなくても、入手することが出来る。そのためせっかく無料あるいは安い授業料で提供している英語のクラスがあるにもかかわらず、中高年の南アジア系受講生の数が伸び悩んでいるのは残念だ。「郷に入っては郷に従え」という諺もあるように、英国に定住してきた移民、難民たちは、母国を捨てて英国に移り住んだのであるから、私は個人的に英国の歴史や文化をもっと理解し、英語を話す努力をすべきだと思う。移民の中に母国を尊重し、英国を軽視、非難するものが近年増えたことが、2005年7月7日に起こった

英国で教育を受けた南インド系の移民によるロンドンのテロ事件などに繋がってしまったのではと懸念されている。移民、難民たちの英国に対する異文化理解を深めることは必然であり、そのためには Department for Education and Skills の教材 *Skills for Life: ESOL* を学生の英国理解に役立てるように改訂すべきである。英国の誇るべき長い歴史、文化遺産、建築、キリスト教の教え、英文学の傑作など英国人が初等、中等学校で学ぶような、英国では常識とみなされている知識を移民たちに英語の授業を通して与えることによって、英国文化や社会のより良い理解へ導くのではないだろうか。

## おわりに

### レスターの移民の英語教育のケースを日本の英語教育に活用できるか

レスターの移民のための英語コースは前述したような問題点、弱点を抱えているが、このコースから学ぶべきことは多く、特に教授法、教材は、日本の英語教育にも十分活用出来ると思う。近年、日本企業のグローバル化が進むにつれて、ユニクロ、楽天のような日本企業は、外国人の社員を多く雇用するようになり、そのため英語が社内の公用語として使われるようになった。他の日本企業も国際舞台で活躍できるような人材を絶えず必要としており、グローバル教育の必要性が強く叫ばれている。

しかしながら、日本の中学校、高等学校、大学における英語教育は、今もって語彙や文法の習得、英文和訳が中心のため、大学に入っても英語による簡単な自己紹介すらできず、また比較的遅い速度の TOEIC のリスニング問題すら良く聞き取れない学生が多いのが現状だ。グローバルな人材養成のための第一段階として、リスニング力と会話力の欠如を克服する必要がある。そのためには、英語のリスニングとスピーキングの技能を短期



間で高めることに実際成功しているレスターの移民の英語コースを大いに参考にすべきだと思う。具体的に学ぶべき点は次の通りだ。まず少人数制を導入し、communicative approach（コミュニケーション・アプローチ）に基づき、英語教師は、ネイティブであるなしにかかわらず、授業を全て英語のみで教え、初級レベルからも生徒に英語を話す環境づくりをする。またレスターの英語教員の多くが初級レベルの生徒に使用している Department for Education and Skills が開発した教材 *Skills for Life: ESOL* は、英語を母語としない学生が、英語圏で様々な状況に置かれた時に不可欠な対話を載せているため、実用英語力に欠ける日本の学生には最適である。日本人学生が旅行、留学、卒業後就職してからの出張などで、海外に行った時に困らないだけの会話力を身に付けるのに役立つばかりか、絵、写真の英語による描写や role plays の練習問題は、英語を話すことへの違和感を取り除くことができ効果的だ。

加えて中級レベルでなされている討論への参加の仕方や、自分の意見、感想を英語で述べる多くの訓練は、学生に英語を話す自信を身に付けさせる。さらに上級レベルでのパワーポイントなどを用いての口頭発表は、英語を話す技能の更なる向上に繋がっている。教師は各学生が、様々な与えられたテーマについての資料を自ら集め、理解し、他の学生たちに情報を正確に報告するだけにとどまらず、分析し、自らの意見を発表するという課題を必ず課す。そして発表後は教師並びに他の生徒たちの質問に英語で答える。こういった授業形態は、移民の英語コースだけでなく、英国の中等学校の英語並びに他の外国語の授業の中でも積極的に導入されていて、極めて効果的な教授法だと英国では考えられている。

日本でも最近英語によるプレゼンテーションを教える大学が増えてきており、このこと自体はいい傾向だが、こういった授業を受講するにあたって、全く準備ができていない学生が多いのが事実だ。簡単な意見すら英語で

述べることの出来ない学生が、こういったハイレベルな授業についていけないのは当然である。また日本の大学では、英語の能力別編成を組んでいる大学が少ないことも、プレゼンテーションのような授業が効果的に運営できていない理由でもある。国際舞台に出ても、英語で物おじせず討論に参加したり、スピーチをしたりできる高度な英語力を持つ国際人養成のためには、中学校から大学に至るまで明確で、丁寧かつ念入りな一貫した英語教育の授業計画が求められる。レスターの英語教育の場合のように、レベル別にはっきりとした授業目標を定め、基礎から上級レベルに至るまで会話力を絶えずレベルアップできるような一貫した授業計画を立てなければ、レスターのような成功例は、日本の大学のプレゼンテーションの授業ではなかなか見出せないだろう。基礎会話力を中学卒業時までに習得させ、中級レベルの会話力を高校卒業時までに徹底的に身に付けさせることができれば、大学で高度なプレゼンテーションの技能を磨くことも可能となる。

更に日本の大学の英語教育で欠如しているのは、異文化理解のクラスである。レスターでは移民の上級レベルのクラスは、学生の出身国が多様であるため、各学生の出身国の歴史、文化、宗教などを口頭発表させる機会を与えている。また移民たちが英国で生活するにあたって不可欠な情報、例えば英国の教育制度、医療制度、雇用制度なども教材を通して提供している。このような授業は、多くの国々の異文化理解を深めるためにも極めて有効である。日本の大学でももっと日本人学生と留学生との交流の場を広げ、留学生に自国について英語で報告させ、日本人学生が異文化理解にもっと積極的な姿勢を培うような機会を増やしていくべきである。それと同時に英語圏の文化や社会を英語で講義し、学生が日本との比較検討できるような授業を今後は増やしていくべきだ。

また日本人の大学生の多くは英語を書く力も劣っている点は改善すべき

深刻な問題である。私事で恐縮だが、英国の大学に勤務していた時は、英国人の学生のエッセイの添削や学士、修士論文の指導も行った経験があり、日本の大学でもアカデミック・ライティングの授業を担当している。日本の学生の場合、帰国子女を除いて、簡単な英語を間違いなく書ける学生が少ないことに驚いた。アカデミック・ライティングと銘打っていないが、パラグラフ・ライティングすら出来ない学生が多く、添削と言うより、私が学生の提出物を全て書き直している場合が多い。句読点の使い方、エッセイ・ライティングには必須の注の付け方、引用文の挿入法、参考文献の作成の仕方など、英国では、12歳の生徒すら知っていることが、日本の大学生の大多数は理解していない。また最近では日本のグローバル企業は、従業員を採用する際、第一段階として、英語で作成された履歴書を添付ファイルで送付することを要求するようになってきた。レスターの英語教育では、就職に必須である手紙やメールの書き方、履歴書の作成の仕方がライティングの授業に取り入れられており、生徒の就職活動に大いに役立っている。しかし日本の大学ではこのような実用的な英語を学ぶクラスもほとんどなく、就職活動時、英語による履歴書、他の書類の作成が必要となった場合戸惑う学生が多いのも事実である。

最後に、レスターの移民の英語教育から学んだことを基に、日本における今後の英語教育について考えてみたい。日本がこれから目指すべき理想の英語教育とは、英語の4技能のバランスがとれた教育の実現である。従来の文法、英文和訳中心の偏った英語教育を見直し、ヒヤリング力、スピーキング力の強化を図ると共に就職活動にも役立つような、実用的な履歴書作成などの技術や、英語による討論、プレゼンテーションなど国際人として活躍出来る土台作りの要素を取り入れた総合的な英語教育を行っていくべきである。そのためには、中学、高等学校におけるこれまでの英語教育の大きな見直しと改革並びに大学における英語教育のカリキュラムの

改善が必要となる。

1980年代の半ばまで、英国でも初等、中等、高等教育におけるドイツ語、フランス語などの外国語教育は、日本の従来の英語教育のように、文法、翻訳中心の伝統的な教授法に基づいて行われてきた。しかし実用的な生きた外国語を学びたいという生徒側からの強い要望に応じて、文部省は、1985年以降大きなカリキュラム改革を実施してきた。新しいカリキュラムでは、外国語でコミュニケーションを図ることに重点を置く communicative method や immersion method（没入法と呼ばれている学習中の言語のみを使用する外国語教授法）を採用し、教師は授業中一切英語を話さず、外国語を母語として学べるような環境作りをし、kinesthetic method（learning by doing）に基づいて、生徒に授業への活発な参加を促す外国語教育を目標とした<sup>84</sup>。この教育改革は、外国語を話す、聞く力の習得には極めて効果的で、短期間で目覚ましい成果を収めたばかりでなく、4技能のバランスのとれた外国語習得の理想的な例を示してくれた。日本でも英国の成功例から多くを学び、4技能のバランスのとれた実際に役立つ英語教育を一日も早く実現してもらいたいと切願し、本稿の考察が日本の英語教育、特に大学教育の今後の改善の上で、何らかの参考になればと願う。

## 注

- 1 On David Cameron's speech at Munich Security Conference on 5 February 2011, see <http://www.number10.gov.uk/news/pms-speech-at-munich-security-conference/>; Matt Falloon, 'Multiculturalism has failed in Britain – Cameron', London Reuters, 5 February, 2011; 'Multiculturalism and Britain's national identity', *The Guardian*, 7 February, 2011; Jamie Doward, 'David Cameron's attack on multiculturalism divides the coalition', *The Observer*, 6 February, 2011.
- 2 Aubrey Newman (ed.), *The Jewish East End, 1840-1934*, London: Jewish Historical Society of England, 1981; Aubrey Newman (ed.), *The Board of Deputies of British*

- Jews, 1760-1985: A Brief Survey*, London: Vallentine Mitchell, 1987; Anne Kershen (ed.), *London, The Promised Land?: The Migrant Experience in a Capital City*, Aldershot: Avebury, 1997; Colin Holmes (ed.), *Immigrants and Minorities in British Society*, London: George Allen & Unwin, 1978; Colin Holmes, *John Bull's Island: Immigration and British Society, 1871-1971*, Basingstoke: Macmillan, 1988; Colin Holmes, *A Tolerant Country? Immigrants, Refugees and Minorities in Britain*, London: Faber and Faber, 1991.
- 3 Leicester City Council, 'Ethnic Composition: Census 2011'.
  - 4 Kathy Burrell, *Moving Lives: Narratives of Nation and Migration among Europeans in Post-War Britain*, Aldershot: Ashgate, 2006; Kathy Burrell & Panikos Panayi (eds), *Histories and Memories: Migrants and their History in Britain*, London: I. B. Tauris, 2005; John Martin & Gurharpal Singh, *Asian Leicester*, Stroud: Sutton Publishing, 2002; Rosalind Adam (comp.), *Jewish Voices: Memories of Leicester in the 1940s and 50s*, Leicester: Writing School Leicester Ltd, 2009.
  - 5 Kiyotaka Sato (ed.), *Life Story of Mrs Claire Wintram: A Jewish Woman and Her Identity*, Tokyo: Research Centre for the History of Religious and Cultural Diversity, 2010; Kiyotaka Sato (ed.), *Life Story of Mrs Elvy Morton: First Chair of the Leicester Caribbean Carnival*, Tokyo: Research Centre for the History of Religious and Cultural Diversity, 2010; Kiyotaka Sato (ed.), *Mrs Jasvir Kaur Chohan: Life Story of A Sikh Woman and Her Identity*, Tokyo: Research Centre for the History of Religious and Cultural Diversity, 2011.
  - 6 On Leicester, see David Nash & David Reeder (eds), *Leicester in the Twentieth Century*, Dover: Alan Sutton, 1993; Ben Beazley, *Wartime Leicester*, Stroud: Sutton Publishing Limited, 2004; Ben Beazley, *Postwar Leicester*, Stroud: Sutton Publishing Limited, 2006; Ned Newitt, *A People's History of Leicester*, Derby: Breedon Books, 2008; Malcolm Elliott, *Leicestershire Events*, Chichester: Phillimore, 2004; Steve England (comp.), *Memories of Leicestershire*, Leicester: Leicester Mercury Group, 2003.
  - 7 Sarah Levitt, *Victorians Unbuttoned: Registered Designs for Clothing, their Makers and Wearers, 1839-1900*, London: George Allen and Unwin, 1986; Sarah Levitt, 'Shirts, Polkas, Cardigans and Jerseys: Leicester Knits of the Nineteenth Century', in

- John Hinks(ed.), *Aspects of Leicester: Discovering Local History*, Barnsley: Wharncliffe Books, 2000.
- 8 Nash & Reeder(eds), *Leicester in the Twentieth Century*, p. 184.
  - 9 Ibid., pp. 184-186.
  - 10 Personal interview with Alice Beer, 5 September, 2010; Personal interview with Ada Mary Pearce, 30 August, 2014.
  - 11 Nick Kimber, 'Race and Equality', in Pat Thane(ed.), *Unequal Britain*, London: Continuum, 2010, p. 29; Hermann Kellenbenz, 'German Immigrants in England', in Holmes(ed.), *Immigrants and Minorities in British Society*, pp. 63-76.
  - 12 Wendy Webster, *Imagining Home: Gender, 'Race', and National Identity, 1945-64*, London: UCL Press, 1998, pp. 25-27.
  - 13 On British Nationality Act in 1948, see J. M. Evans, *Immigration Law*, London: Sweet Maxwell, 1983, pp. 59-68.
  - 14 Kimber, 'Race and Equality', p. 32.
  - 15 Ruth Brown, 'Racism and Immigration in Britain', *International Socialism Journal*, vol. 68, Autumn 1995, p. 5; Sato(ed.), *Life Story of Mrs Elvy Morton*, p. 14; Sato (ed.), *Mrs Jasvir Kaur Chohan*, pp. 12-13.
  - 16 Sato(ed.), *Mrs Jasvir Kaur Chohan*, pp. 12-13.
  - 17 On The Commonwealth Immigration Act in 1962, see Evans, *Immigration Law*, pp. 63-68.
  - 18 Leicester City Council, 'Area Profile for the City of Leicester: Demographic and Cultural', in Leicester City Council, 'The Diversity in Leicester, A Demographic Profile', Leicester: Leicester City Council, May 2008. <http://www.leicester.gov.uk/> 参照。
  - 19 Carnevali & Strange, *Twentieth-Century Britain: Economic, Cultural and Social Change*, pp. 249-250
  - 20 Sato(ed.), *Mrs Jasvir Kaur Chohan*, p. 107; Bill Law, Tim Haq & Dorothy Douglas (eds), *Ugandan Memories: Tales of the Ugandan Asian Diaspora*, Leicester: East Midlands Economic Newwork, 2009, p. 56.
  - 21 'UK Census: Survey of Leicester, 1983', in Nash & Reeder(eds), *Leicester in the Twentieth Century*, p. 187.

- 22 Law & Douglas (eds), *Ugandan Memories*, p. 56.
- 23 *The Ugandan Argus*, 17 September, 1972.
- 24 'UK Census: Survey of Leicester, 1983', in Nash & Reeder (eds), *Leicester in the Twentieth Century*, p. 187.
- 25 Leicester City Council, 'Area Profile for the City of Leicester: Demographic and Cultural'.
- 26 Ibid., p. 11.
- 27 Ibid., p. 11.
- 28 Ibid., p. 11.
- 29 See 'Ethnic Composition: Census 2001', in Leicester City Council, 'The Diversity in Leicester', p. 1.
- 30 Leicester City Council, 'Area Profile for the City of Leicester', p. 2.
- 31 Ibid., p. 2.
- 32 Ibid., p. 2.
- 33 Sato (ed.), *Mrs Jasvir Kaur Chohan*, p.17; Sato (ed.), *Life Story of Mrs Claire Wintram*, p. 19; Leicester City Council, 'The Diversity in Leicester', pp. 1, 6-7.
- 34 Ibid., p. 10.
- 35 Ibid., p. 1. The website of the Department of Education and Skills, <http://www.dfes.gov.uk/rsgateway> を参照。
- 36 Leicester City Council, 'The Diversity in Leicester', p. 10.
- 37 Sato (ed.), *Life Story of Mrs Claire Wintram*, p. 59.
- 38 Sato (ed.), *Mrs Jasvir Kaur Chohan*, pp. 108-109.
- 39 Leicestershire County Council (ed.), *Highfields Remembered: Memories of How a Community Developed from the First World War to Present Day*, Leicester: Leicestershire Multicultural Archive Project, 1996, pp. 26-27; Martin & Singh, *Asian Leicester*, p. 75; A Soft Touch Production, *I Came Here: Experiences of Moving to, and Living in Leicester*.
- 40 Martin & Singh, *Asian Leicester*, pp. 74-75; Sato (ed.), *Mrs Jasvir Kaur Chohan*, p. 172; Bill Law & Tim Haq (ed.), *Belgrave Memories: Tales of Belgrave*, Leicester: East Midlands Economic Network, 2007, pp. 17, 73, 79, 88.
- 41 Sato (ed.), *Life Story of Mrs Elvy Morton*, pp. 34-36.



- 42 Law & Haq (eds), *Belgrave Memories*, p. 89.
- 43 Martin & Singh, *Asian Leicester*, p. 14.
- 44 Ziauddin Sardar, *Balti Britain: A Journey through the British Asian Experience*, London: Granta, 2008; R .G. Grant, *The History of Modern Britain: From 1900 to the Present Day*, London: Carlton Books, 2010, p. 288.
- 45 Nash & Reeder (eds), *Leicester in the Twentieth Century*, pp. 107-108, 118.
- 46 Leicestershire County Council (ed.), *Highfields Remembered*, p. 82.
- 47 The Best Value General Survey for the Audit Commission in 2006.
- 48 The Residents' Survey conducted by Mori for Leicester City Council in 2005; Leicester City Council, 'The Diversity in Leicester', p. 22.
- 49 Ibid., p. 22.
- 50 Grant, *The History of Modern Britain*, p. 373; Derek McGhee, *Intolerant Britain?: Hate, Citizenship and Difference*, Maidenhead: Open University Press, 2005, pp. 43-45.
- 51 Leicester City Council, 'The Diversity in Leicester', p. 24. The section of English Speakers of Other Languages in Leicester Adult Skills and Learning Service, *Adult Skills and Learning in Leicester, 2011-12*, Leicester: Leicester Adult Skills and Learning Service, 2011 も参照。
- 52 Personal interview with Helen Mackay, 2 September, 2011.
- 53 Sato (ed.), *Life Story of Mrs Elvy Morton*, p. 35.
- 54 Gurharpal Singh & Darshan Singh Tatla, *Sikhs in Britain: The Making of a Community*, London: Zed Books, 2006, p. 123.
- 55 Leicester City Council, 'The Diversity in Leicester', p. 24.
- 56 The section of English Speakers of Other Languages in Leicester Adult Skills and Learning Service, *Adult Skills and Learning in Leicester, 2014-15*, Leicester: Leicester Adult Skills and Learning Service, 2014 参照。
- 57 Department for Education and Skills, *Adult ESOL Core Curriculum*. London: DfES Publication, 2001 A.
- 58 Department for Education and Employment, *The National Literacy Strategy – Framework for Teaching*, London: DfEE Publication, 1998 A; Department for Education and Employment, *The National Numeracy Strategy –Framework for*

- Teaching*, London: DfEE Publication, 1998 B; Department for Education and Skills, *Adult ESOL Core Curriculum*. London: DfES Publication, 2001 A.
- 59 Leicester Adult Education College の 2014-2015 の Prospectus と ESOL のプログラム参照。
- 60 Leicester Adult Education College の ESOL のコーディネーター聞き取り。
- 61 Leicester Adult Education College の 2014-2015 の ESOL プログラムの Additional Courses のセクション参照。
- 62 Leicester College の 2014-2015 の Prospectus 参照。
- 63 Department for Education and Skills, *Diagnostic Assessment ESOL*. London: DfES Publication, 2002.
- 64 Personal interview with Deborah Green, 15 March, 2014.
- 65 同上。
- 66 同上。
- 67 同上。
- 68 Personal interview with Maria Collins, 20 August, 2014.
- 69 Personal interview with Catherine Gwinnett, 10 August, 2005.
- 70 同上。
- 71 Personal interview with Deborah Green, 20 March, 2013.
- 72 Personal interview with Maria Collins, 28 August, 2014.
- 73 Personal interview with Deborah Green, 25 August, 2013.
- 74 Personal interview with Deborah Green, 5 September, 2014.
- 75 Leicester College の *Curriculum Area – ESOL Induction Booklet* 参照。
- 76 Leicester Adult Education College の 2014-2015 の ESOL のプログラム参照。
- 77 Personal interview with Catherine Gwinnett, 10 August, 2005.
- 78 Personal interview with David Mackay, 20 August, 2014.
- 79 Personal interview with Deborah Green, 20 March, 2013.
- 80 同上。
- 81 同上。
- 82 同上。
- 83 Personal interview with Gill Pemberton, 2 September, 2014.
- 84 Personal interview with Maria Collins, 28 August, 2014.

### 参考文献

- Adam, Rosalind(comp.), *Jewish Voices: Memories of Leicester in the 1940s and 50s*, Leicester: Writing School Leicester Ltd, 2009.
- Banner, John W., *Discovering Leicester: The Researches of a Leicester City Guide*, Leicester: Leicester City Council, 1991.
- Beazley, Ben, *Postwar Leicester*, Stroud: Sutton Publishing Limited, 2006.
- Beazley, Ben, *Wartime Leicester*, Stroud: Sutton Publishing Limited, 2004.
- Bradford Vision, 'Community Pride Not Prejudice: Making Diversity Work in Bradford', *Bradford District Race Review*, Bradford: Bradford Vision, 2001
- Brighton, Shane, 'British Muslims, multiculturalism and UK foreign policy: "integration" and "cohesion" in and beyond the state', *International Affairs*, 83:1, 2007.
- Brown, Ruth, 'Racism and Immigration in Britain', *International Socialism Journal*, vol. 68, Autumn, 1995.
- Burrell, Kathy & Panayi, Panikos(eds), *Histories and Memories: Migrants and their History in Britain*, London: I. B. Tauris, 2005.
- Burrell, Kathy, *Moving Lives: Narratives of Nation and Migration among Europeans in Post-War Britain*, Aldershot: Ashgate, 2006.
- Carnevali, Francesca & Strange, Julie-Marie, *Twentieth-Century Britain: Economic, Cultural and Social Change*, 1994, Harlow: Pearson Longman, 2007.
- Carter, R. & Nunan, D.(eds) . *The Cambridge Guide to Teaching English to Speakers of Other Languages*, Cambridge: Cambridge University Press, 2001.
- Department for Education and Employment, *A Fresh Start – Improving Literacy and Numeracy*, London: DfEE Publication, 1999.
- Department for Education and Employment. *Breaking the Language Barriers*, London: DfEE Publication, 2000.
- Department for Education and Employment, *The National Literacy Strategy – Framework for Teaching*, London: DfEE Publication, 1998 A.
- Department for Education and Employment, *The National Numeracy Strategy – Framework for Teaching*, London: DfEE Publication, 1998 B.
- Department for Education and Skills, *Adult ESOL Core Curriculum*. London: DfES Publication, 2001 A.

Department for Education and Skills, *Adult Literacy Core Curriculum*. London: DfES Publication, 2001 B.

Department for Education and Skills, *Citizenship Materials for ESOL Learners*, London: DfES Publication, 2004.

Department for Education and Skills, *Diagnostic Assessment ESOL*. London: DfES Publication, 2002.

Department for Education and Skills, *Skills for Life: ESOL, Learner Materials Pack, Entry 1*. London: DfES Publication, 2003 A.

Department for Education and Skills, *Skills for Life: ESOL, Learner Materials Pack, Entry 2*, London: DfES Publication, 2003 B.

Department for Education and Skills, *Skills for Life: ESOL, Learner Materials Pack, Entry 3*, London: DfES Publication, 2003 C.

Department for Education and Skills, *Skills for Life: ESOL, Learner Materials Pack, Level 1*, London: DfES Publication, 2003 D.

Department for Education and Skills, *Skills for Life: ESOL, Learner Materials Pack, Level 2*, London: DfES Publication, 2003 E.

Department for Education and Skills, *Skills for Life: ESOL, Teacher's Notes, Entry 1*, London: DfES Publication, 2003 F.

Department for Education and Skills, *Skills for Life: ESOL, Teacher's Notes, Entry 2*, London: DfES Publication, 2003 G.

Department for Education and Skills, *Skills for Life: ESOL, Teacher's Notes, Entry 3*, London: DfES Publication, 2003 H.

Department for Education and Skills, *Skills for Life: ESOL, Teacher's Notes, Level 1*, London: DfES Publication, 2003 I.

Department for Education and Skills, *Skills for Life: ESOL, Teacher's Notes, Level 2*, London: DfES Publication, 2003 J.

Department for Education and Skills, *Skills for Life: Teacher Support Documents, Literacy, Numeracy, ESOL*, London: DfES Publication, 2003 K.

Department for Education and Skills, *Working with Refugees and Asylum Seekers*, London: DfES Publication, 2003 L.

Doward, Jamie, 'David Cameron's attack on multiculturalism divides the coalition', *The*

- Observer*, 6 February, 2011.
- Elliott, Malcolm, *Leicestershire Events*, Chichester: Phillimore, 2004.
- England, Steve (comp.), *Memories of Leicestershire*, Leicester: Leicester Mercury Group, 2003.
- Evans, J.M., *Immigration Law*, London: Sweet Maxwell, 1983.
- Falloon, Matt, 'Multiculturalism has failed in Britain – Cameron', London Reuters, 5 February, 2011.
- Gilley, Sheridan, 'English Attitudes to the Irish in England, 1780-1900', in Colin Holmes (ed.), *Immigrants and Minorities in British Society*, London: George Allen & Unwin, 1978.
- Grant, R.G., *The History of Modern Britain: From 1900 to the Present Day*, London: Carlton Books, 2010, p. 288.
- Holmes, Colin, *A Tolerant Country? Immigrants, Refugees and Minorities in Britain*, London: Faber and Faber, 1991.
- Holmes, Colin (ed.), *Immigrants and Minorities in British Society*, London: George Allen & Unwin, 1978.
- Holmes, Colin, *John Bull's Island: Immigration and British Society, 1871-1971*, Basingstoke: Macmillan, 1988.
- Kellenbenz, Hermann, 'German Immigrants in England', in Colin Holmes (ed.), *Immigrants and Minorities in British Society*, London: George Allen & Unwin, 1978.
- Kershaw, Roger, & Pearsall, Mark, *Immigrants and Aliens*, Richmond: The National Archives, 2004.
- Kershen, Anne (ed.), *London, The Promised Land?: The Migrant Experience in a Capital City*, Aldershot: Avebury, 1997.
- Kimber, Nick, 'Race and Equality', in Pat Thane (ed.), *Unequal Britain*, London: Continuum, 2010.
- Law, Bill, & Haq, Tim (eds), *Belgrave Memories: Tales of Belgrave*, Leicester: East Midlands Economic Network, 2007.
- Law, Bill, & Lomax, Richard (eds), *Preserving Asian Heritage: An Oral History Project in Leicester*, Leicester: East Midlands Economic Network, 2005.
- Law, Bill, Haq, Tim, & Douglas, Dorothy (eds), *Ugandan Memories: Tales of the*

- Ugandan Asian Diaspora*, Leicester: East Midlands Economic Newwork, 2009.
- Leicester City Council, 'Area Profile for the City of Leicester: Demographic and Cultural', in Leicester City Council, 'The Diversity in Leicester, A Demographic Profile', Leicester: Leicester City Council, May 2008. See <http://www.leicester.gov.uk/>.
- Leicester City Council Planning Department, *The Quality of Leicester*, Leicester: Leicester City Council, 1993.
- Leicestershire County Council(ed.), *Highfields Remembered: Memories of How a Community Developed from the First World War to Present Day*, Leicester: Leicestershire Multicultural Archive Project, 1996.
- Levitt, Sarah, 'Shirts, Polkas, Cardigans and Jerseys: Leicester Knits of the Nineteenth Century', in John Hinks(ed.), *Aspects of Leicester: Discovering Local History*, Barnsley: Wharnccliffe Books, 2000.
- Levitt, Sarah, *Victorians Unbuttoned: Registered Designs for Clothing, their Makers and Wearers, 1839-1900*, London: George Allen and Unwin, 1986.
- Martin, John, & Singh, Gurharpal, *Asian Leicester*, Stroud: Sutton Publishing, 2002.
- McGhee, Derek, *Intolerant Britain?: Hate, Citizenship and Difference*, Maidenhead: Open University Press, 2005.
- Modood, Tariq, *Multicultural Politics: Racism, Ethnicity and Muslims in Britain*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 2005.
- Mondal, Anshuman A., *Young British Muslim Voices*, Oxford: Greenwood World Publishing, 2008.
- Nash, David, & Reeder, David(eds), *Leicester in the Twentieth Century*, Dover: Alan Sutton, 1993.
- Newman, Aubrey(ed.), *The Board of Deputies of British Jews, 1760-1985: A Brief Survey*, London: Vallentine Mitchell, 1987.
- Newman, Aubrey(ed.), *The Jewish East End, 1840-1934*, London: Jewish Historical Society of England, 1981.
- Panayi, Panikos, *Immigration, Ethnicity and Racism in Britain, 1815-1945*, Manchester: Manchester University Press, 1994.
- Sardar, Ziauddin, *Balti Britain: A Journey through the British Asian Experience*, London: Granta, 2008.

- Sato, Kiyotaka (ed.), *Life Story of Mrs Claire Wintram: A Jewish Woman and Her Identity*, Tokyo: Research Centre for the History of Religious and Cultural Diversity, 2010.
- Sato, Kiyotaka(ed.), *Life Story of Mrs Elvy Morton: First Chair of the Leicester Caribbean Carnival*, Tokyo: Research Centre for the History of Religious and Cultural Diversity, 2010.
- Sato, Kiyotaka(ed.), *Mrs Jasvir Kaur Chohan: Life Story of A Sikh Woman and Her Identity*, Tokyo: Research Centre for the History of Religious and Cultural Diversity, 2011.
- Singh, Gurharpal, & Tatla, Darshan Singh, *Sikhs in Britain: The Making of a Community*, London: Zed Books, 2006.
- Webster, Wendy, *Imagining Home: Gender, 'Race', and National Identity, 1945-64*, London: UCL Press, 1998.